Behavioral Differential 法を用いた社会的態度の行動要素の分析

—日米印比較文化研究の一例¹—

—学習院大学 田 中 靖 政²—

人間の態度と行動との間には、今なお未知の間隙が認められる。たとえば、態度構造と態度変容の理論について、Katz と Stotland (1959) は次のように述べている。“態度の研究は、情緒性や価値評価の測定だけで済まされるものではない。態度の研究には、態度の構成要素である信念や行為、そしてさらに態度と価値体系の関連などが含まれなければならない。”

いくつかの社会心理学的研究が、この態度の問題に焦点をしばって行なわれてきた。中でも異色のなものとしては、Osgood et al, (1957) の SD 法による態度の評価要素の測定、Fishbein (1961) の態度と認知的情緒的要素の対応関係の分析、あるいは目標の遂行と態度対象の承認の相互関係を扱った Rosenberg (1956) の実験などが挙げられるだろう。ところが Katz と Stotland によって指摘された社会的態度の行為要素は、ほとんどかえりみられることがなかった。おそらく、Bogardus (1928) の社会距離尺度は、態度と行為との対応関係を少くとも限定的に明らかにしたパイオニア的研究の一つと数えられるものであるだろう。

最近 Triandis (1964) は、この理論的な問題を解く一つの実験方法として、Behavioral Differential 法を提唱し、その方法論的妥当性と信頼性を明らかにした。Osgood の SD 法に詳しい研究者には、SD 法の場合の修飾語対が社会的行為を代表する動詞に変えられ、さらに SD 法における一般的刺激概念が“刺激人物”に限定

された形式を思い浮かべるだけで、Behavioral Differential 法の概略が理解できるであろう。

すなわち、一般的に、Behavioral Differential 法によって集められたデータ・キューブの第 1 の軸は“刺激人物”であり、これには性、年齢、人種、職業、宗教、階級などの諸変数を仮定することができる。第 2 の軸は、実際の人間（すなわち被験者）が、“刺激人物”との対人関係で意図する“社会的行為”である。たとえば、“結婚する”、“選挙の際に投票する”、“一緒に酒を飲む”は何れも対人関係に起こりえる社会行為を代表するものである。第 3 の軸は、被験者自身の諸変数、文化的社会的背景や性格特性などから構成されている。被験者の典型的判断は、Fig. 1 の例で示される。

集められたデータには幾通りもの分析が可能である。たとえば、我々は“社会行為”間の相関を求めることもできるし、“刺激人物”間にある対応関係を調べることもできる。あるいは、異なる被験者群の間で、結果を比較することも可能である。データ・キューブの処理には、SD 法において試みられたのと同じように多種のレベルにわたる分析方法が、その研究目的に応じて何種類も考えられる³。

Triandis (1964) の実験は、人種、性、年齢、職業、宗教を変数とする合計 34 個の複合的“刺激人物”と、1850 年以降にアメリカ人筆者によって書かれた 80 冊の小説の内容分析から、抽出され、選択された 61 の代表的“社会行為”項目を用い、アメリカ人大学生を被験者として行われたものであった。社会的行為の相互相関を因子分析することによって Triandis は、これら 61 の行為項目が代表する社会的態度の行為要素（あるいは行為意図）が、単一次元のものではなく、I. 服従を伴う社会的承認（たとえば、“服従する”、“選挙運動に協力する”）、II. 結婚の承認（たとえば、“結婚する”、“愛する”）、III. 交友的承認（たとえば、“親友として受け入れる”、“一緒に食事をする”）、IV. 敵意と社会的距離（たとえば、“隣人づきあいから締め出す”、“投票を禁ずる”）、V. 社会的上下関係（たとえば、“目下の人

¹ An exploratory cross-cultural study of the behavioral component of social attitudes by the Behavioral Differential method. 本報告は、Illinois 大学 Harry C. Triandis, Mysore 大学 A. V. Shanmugam, 学習院大学田中靖政の共同研究に基くものである。この研究は ONR 基金の援助を受け、比較文化的「交渉」研究の一環として行なわれた。数的処理は Illinois 大学 Digital Computer Laboratory の IBM 7094 システムによった。

² Yasumasa Tanaka (Gakushuin University)

³ くわしくは、拙著“意味の測定と情緒的意味体系に関する諸研究”を参照されたい。

として扱う”，“命令する”）の5種類に上る主要行為因子から成る多次元的構造を持つものであることを発見した。ちなみに、これらの5因子は、約60%の分散を説明するものであった。

ここで報告される研究は、上記の Triandis 実験の比較文化的延長である。Triandis 実験の諸結果に基づき、各行為因子をもっとも良く代表すると考えられる英語の行為項目が選ばれ日本語と Kannada 語に翻訳された。性、年齢、宗教、職業を変数とする複合刺激人物が英語で先ず構成され、日本語と Kannada 語に翻訳された。我々の主たる目的の一つは、1964 年の Triandis 論文で報告された行為因子が、アメリカ人の行為意図として独得のものであるのか、それとも日米印各言語・文化集団に普遍的なものであるかを、経験的に検証することにあった。

方 法

刺激人物の構成 我々は刺激人物の構成に際して、性（男、女）、年齢（“若い人”、“中年の人”、“年寄り”）、宗教（“私と宗教が同じ人”、“私と宗教が違う人”）、職業（“医者”、“大工”）という5種の独立変数（あるい

は9個の単独刺激人物）を設定し、これらの変数間に可能なすべての組合せによって、 $2 \times 3 \times 2 \times 2$ 、合計24通りの複合刺激人物（たとえば、表1に示されている“若く、女性で、私と宗教が違う、医師”）を作り上げた。被験者による判断には、単独刺激人物9、複合刺激人物24、信頼度テストのための繰返し2、合計35の刺激が日米印被験者に共通して、しかしそれぞれの自国語で与えられた。

社会的行為の選択 Triandis (1964) 実験で用いられた9段階“行為尺度”の中で各行為因子に負荷量をもっとも大きかった代表的尺度を16選び出し、与えられた刺激人物に対する行為意図の測定に用いた。これら16の行為尺度は日米印被験者群にそれぞれ自国語で与えられた。Fig. 1は、この一組の9段階行為尺度の日本語版である。

被験者 日米大学生男女各50名をそれぞれ1群とし、Kannada 語を日常語とするインド人男子100名を50名ずつの2群に分け、合計6組の被験者群について以下の分析を行った。

結 果

社会行為因子分析 被験者群ごとに、各刺激人物に対する行為尺度平均値が求められ、16（尺度） $\times$ 35（刺激人物）の行列が得られ、これに基づいて行為間の相互相関が計算され、Principal Axis 法による因子分析が行われた。抽出された因子は、Varimax 法によって回転された。回転後の結果は、Table 1 に示されている。

日米印各被験者群に共通して、“命令されたい”と“その人の云う通りに行動したい”で定義される「社会的承認と服従」因子、“親友として受け入れたい”と“無駄話をたたきたい”で定義される「交友的承認」因子、そして“結婚したい”で定義される「結婚」因子が抽出された。この3因子は各群において75%から90%の分散を説明するものであった。この因子分析結果は、行為尺度の使われ方、あるいは行為意図の枠組が、言語、文化、性別を通じて、かなり安定したものであり、決して無秩序なものでないことを示唆するものである。

しかし、一方では、6組の被験者群に抽出された因子には、それぞれの特異性が顕著に認められた。たとえば、第1に Table 1 の日本女子群を眺めてみよう。他の5群の被験者群と比較して日本女子の「社会的承認と服従」因子には“命令されたい”と“その人の云う通りに行動したい”という2行為の負荷量が他の行為のそれに比べて著しく高い。このことは、おそらく日本人女子の社会的態度を構成する行為要素の中に、受身の服従を意図する特に強い指向のあることを示すものであろう。彼らの行為意図は、異性間では恋愛と結婚、地位の平等な個人間では友情と交際、しかし社会的地位の上下が問題となるような対人関係では服従という、相互に独立し

若く、女性で、私と宗教が違う、医者

そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
目下の人として扱いたい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
性格を賞讃したい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
命令されたい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
恋をしたい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
選挙運動に際して協力したい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
無駄話をたたきたい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
信用したい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
運動競技でパートナーを組みたい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
願いを聞き入れてやりたい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
婚姻関係によって身内の一人として迎えたい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
その人の言う通りに行動したい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
教えてあげたい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
考えや思いつきをほめてやりたい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
親友として受け入れたい		
そうしたい	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたくない
隣人づきあいから締め出したい		
そうしたくない	1 2 3 4 5 6 7 8 9	そうしたい
結婚したい		

Fig. 1. Behavioral Differential の一例

TABLE 1

日米印三被験者群における Behavioral Differential 尺度の因子分析結果¹

(1) 日本人被験者群

↓ 因子	日 本 男 子 群		日 本 女 子 群	
I	B	目下の人として扱いたくない (.89)	命令されたい (.96)	
		命令されたい (.87)	その人の言う通りに行動したい (.87)	
	D	性格を賞讃したい (.79)	信用したい (.69)	
		その人の言う通りに行動したい (.78)	性格を賞讃したい (.63)	
	尺度	信用したい (.76)	選挙運動に際して協力したい (.53)	
		選挙運動に関して協力したい (.61)	目下の人として扱いたくない (.51)	
	TV	29.42%	22.15%	
因子性	社会的承認と服従		社会的承認と服従	
II	B	考えや思いつきをほめてやりたい (.86)	考えや思いつきをほめてやりたい (.85)	
		願いを聞き入れてやりたい (.83)	無駄話をたたきたい (.79)	
		教えてあげたい (.79)	隣人づき合いから締め出したい (.79)	
	D	無駄話をたたきたい (.74)	親友として受け入れたい (.76)	
		隣人づき合いから締め出したい (.72)	願いを聞き入れてやりたい (.73)	
	尺度	親友として受け入れたい (.70)	選挙運動に際して協力したい (.72)	
		運動競技でパートナーを組みたい (.61)	性格を賞讃したい (.72)	
			教えてあげたい (.70)	
			信用したい (.66)	
			運動競技でパートナーを組みたい (.63)	
TV	32.45%		36.82%	
因子性	交友的承認		交友的承認	
III	B	恋をしたい (.95)	恋をしたい (.94)	
		結婚したい (.95)	結婚したい (.93)	
	D	婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.83)	婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.77)	
	尺度	運動競技でパートナーを組みたい (.71)	目下の人として扱いたくない (.76)	
			運動競技でパートナーを組みたい (.70)	
	TV	27.58%	28.43%	
因子性	結婚の承認		結婚の承認	

(2) アメリカ人被験者群

↓ 因子	米 男 子 群		米 女 子 群	
I		性格を賞讃したい (.95)	命令されたい (.95)	
	B	信用したい (.94)	信用したい (.95)	
		その人の言う通りに行動したい (.93)	その人の言う通りに行動したい (.93)	
	D	目下の人として扱いたくない (.91)	性格を賞讃したい (.93)	
	尺度	命令されたい (.91)	考えや思いつきをほめてやりたい (.90)	
		考えや思いつきをほめてやりたい (.90)	目下の人として扱いたくない (.89)	
		隣人づき合いから締め出した (.82)	隣人づき合いから締め出した (.76)	
		選挙運動に際して協力したい (.65)	選挙運動に際して協力したい (.72)	
			婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.70)	

	T V	40.07%	46.18%
	因子性	社会的承認と服従	社会的承認と服従
II	B	運動競技でパートナーを組みたい (.94)	無駄話をたたきたい (.93)
	D	願いを聞き入れてやりたい (.93)	教えてあげたい (.62)
	尺	無駄話をたたきたい (.88)	親友として受け入れたい (.58)
	度	親友として受け入れたい (.87)	婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.51)
		教えてあげたい (.84)	
		婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.69)	
	T V	33.61%	17.50%
	因子性	交友的承認	交友的承認
III	B	結婚したい (.92)	恋をしたい (.95)
	D	恋をしたい (.92)	結婚したい (.94)
	尺		運動競技でパートナーを組みたい (.73)
	度		願いを聞き入れてやりたい (.70)
			親友として受け入れたい (.64)
	T V	15.89%	26.54%
	因子性	結婚の承認	結婚の承認

(3) インド人被験者群

↓ 因子	インド男子 I 群		インド男子 II 群	
I	B	その人の言う通りに行動したい (.89)	その人の言う通りに行動したい (.86)	
		命令されたい (.87)	命令されたい (.84)	
	D	信用したい (.81)	信用したい (.70)	
	尺	性格を賞讃したい (.79)	性格を賞讃したい (.65)	
	度	選挙運動に際して協力したい (.76)	目下の人として扱いたくない (.65)	
		考えや思いつきをほめてやりたい (.73)	教えてあげたい (.64)	
		目下の人として扱いたくない (.67)	選挙運動に際して協力したい (.57)	
		婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.58)	考えや思いつきをほめてやりたい (.56)	
	T V	34.40%	26.69%	
	因子性	社会的承認と服従	社会的承認と服従	
II	B	親友として受け入れたい (.89)	無駄話をたたきたい (.89)	
	D	運動競技でパートナーを組みたい (.83)	恋をしたい (.87)	
	尺	教えてあげたい (.82)	運動競技でパートナーを組みたい (.80)	
	度	恋をしたい (.73)	親友として受け入れたい (.77)	
		願いを聞き入れてやりたい (.68)	婚姻関係によって身内の一人として迎えたい (.66)	
		無駄話をたたきたい (.62)	願いを聞き入れてやりたい (.65)	
	T V	27.73%	33.02%	
	因子性	交友的承認	交友的承認	
III	B 尺	結婚したい (.85)	隣人づき合いから締め出したくない (.79)	
	D 度	隣人づき合いから締め出したくない (.64)	結婚したい (.64)	
	T V	13.85%	13.39%	
	因子性	結婚の承認	結婚の承認	

† カッコ内の数字は因子負荷量を表す。

た3つの次元から構成されているとみなすことができよう。

第2の興味ある発見は、インド人男子群が、結婚と恋愛とを区別するというのであった。これは Kannada 語の“恋をする”(あるいは“愛する”)という動詞がギリシャ語の, Eros 的愛から区別された Agape 的愛を内包的に意味するものであるとも考えられるし,あるいはインド人の結婚が恋愛とは無関係に“見合い”あるいは“親同志の取り決め”によって行われている制度的事実を反映するものとも考えられる。この点、この段階の分析では何の確証もなく、さらに精密な言語学的ならびに社会学的検討が必要であろう。

その他の分析 2組以上の異言語、文化被験者群を同一平面で因子分析する方法が Osgood et al. (1963), Tanaka & Osgood (1965) によって Semantic Differential データの汎文化的分析に用いられているが、同様の方法が Behavioral Differential データの分析にも応用されている。また、Semantic Differential 尺度と Behavioral Differential 尺度の対応、すなわち情緒の意味次元と行為次元との間の対応関係の分析も現在すでに進行中である。これらの分析が完了した暁には、被験者群の間の行為因子の同質性、そしてさらに、意味次元と行為次元の重複ないし短絡関係などが始めて明確にされることが期待されている。

引 用 文 献

- Bogardus, E.S. 1928 *Immigration and race attitudes*. Boston: Heath.
- Fishbein, M. 1961 An investigation of the relationships between beliefs about an object and the attitude toward that object. *Technical Report No. 6*, University of California, Los Angeles, Contract No. 233 (54).
- Katz, D., & Stotland, E. 1959 A preliminary statement to a theory of attitude structure and change. In S. Koch (Ed.), *Psychology: A study of a science*. Vol. 3. New York: McGraw-Hill.
- Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. 1957 *The measurement of meaning*. Urbana, Ill.: Univ. of Illinois Press.
- Osgood, C.E., Archer, W.K., & Miron, M.S. 1963 *The cross-cultural generality of affective meaning systems*. Urbana, Ill.: Institute of Communications Research, Univ. of Illinois.
- Rosenberg, M.J. 1956 Cognitive structure and attitudinal affect. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **53**, 367—372.
- 田中靖政 1965 “意味の測定と情緒の意味体系に関する諸研究” 心理学評論, **8**, 27—69.
- Tanaka, Y., & Osgood, C.E. 1965 The cross-subject generality of affective meaning systems. *J. Person. soc. Psychol.*, **2**, 143—153.
- Triandis, H.C. 1964 Exploratory factor analyses of the behavioral component of social attitudes. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **64**, 420—430.

——1965. 8. 5. 受稿——

第一線監督者のパーソナリティーと従業員のモラル¹

——桃山学院大学 滝 野 匡 悦²——
 ——大阪府立大学 米 沢 富士 雄³——
 ——神戸市外国語大学 倉 盛 一 郎⁴——

監督者のリーダーシップが職場の人間関係ないし従業員の生産活動に影響をおよぼすことはさまざまな点から

¹ Personality of the first-line supervisors and morale of followers.

² Masayoshi Takino (Momoyama-Gakuin University)

³ Fujio Yonezawa (University of Osaka Prefecture)

⁴ Ichiro Kuramori (Kobe City University of Foreign Studies)

指摘されている。本研究はリーダーシップの一要因として、第一線監督者のパーソナリティーの問題をとりあげ、それと従業員のモラルとの関係を追及しようとしたものである。Kretch と Crutchfield (1948) はリーダーの機能として14の機能をあげ、Stogdill (1948) はリーダーの共通特性として、知能・学識・責任・活動性・社会的参与・社会経済的地位のような属性をあげている。Haythorn (1958) は、モラルの向上は指導者と被